



六
花
6

俳句雑誌りつか
2018 (平成30年)
cover design ichigo

麦秋のつれなき空となりけり

近江

母の日や子連れの猿をちらとのみ

逃水の果は水田の近江富士

汐越の松過ぎて夏来にけらし

吉崎

蓮如忌の貝を濡れ手に拾ひけり

種が浜

貝酒や夏籠によき法華堂

かひ濡れて舟は敦賀の走り梅雨

走り梅雨蟹のかたへの法華堂

満汐にますほの小貝ぬれにけり

親しほの沖をはるかに蓮如の忌

東尋坊

夏潮の風断崖に来てたわむ

夏汐の千々にもつれて鳶の笛

断崖を覗いて見れば卯浪の手

梅は実に舟ふなの之御亭おちんの太鼓橋

金沢



白山の水この庭に来て温む
雪吊もとれて蒼古の松の花
春落葉手につまみとるお庭番
葉桜のしだれて苔の瑞々し
あやめ見し夜は花札に膝くづす
花街の辻占せんべい茶摘唄
その裏を夜の匂ひの雪解川

雨宝院「まよひ子右」

井戸端に朝顔の苗置いてあり
詩人産めにし茶屋町を猫の親
胎内をくぐり石楠花めくらまし
やん事無き色石楠花に出でにけり
あなむざんやな雨に兜もなき巢鳥

那谷寺

多太神社

おまけ

うたかたのニ^タ夜泊りや松の花

舞子全員無事

豊かなる水を残して鴨引けり
楼門に見返る海ののどけしや
初蝶の伽藍の空に吹かれをり
水草生ふ先へさきへと命あり
母の手を解いてとび込むげかな
蒲公英の絮のひとつを追ひさうに
野蒜掘る土に千切れし匂ひあり
春雷にしぼし文の手置きにけり
古雛白き手袋もて飾る
野遊びの松毬けつて八十路なる

高華抄

芽木の空

佐津のぼる

並木なすポプラ高かり芽吹きまた
芽柳の丈に風あるお塚端
いつ来ても鎮もる御陵松の花
突堤に寄せて遅日の波の音
沈丁の庭先猫が猫を追ふ
雨あがり日差しひろがる芽木の空
愛聴のレコードに疵春惜しむ
閑伽桶の少し水漏る春彼岸
宮鳩を屋根に追ひ上げ春祭
車椅子より起立して卒業歌

畦焼きの火を追うて風走りけり 住田千代子

冬牡丹ほつれし菰に紅絹もみこぼす

梅枝の折れあてさへも匂ひけり

畦焼きの火を追うて風走りけり

じやんけんのばあに勝ちたる菖蒲の芽

切つ先に藻屑光りぬ菖蒲の芽

芽柳のくしげず梳りたき乱れかな

あぜやきのひをおうてかぜはしりけり すみだちよこ

主客を転倒させると、詩情を捉えることがある。この句もそうで、畦火に勢いがついて走っているのを、風が追っていると言った。すると読者はたちまち火の逃げる立場に置かれ、風から必死に逃げようと走っているのを想起する。追いつ追われつの凄まじい光景も見えて、シューベルトの魔王（モリッツ・フォン・シュヴィントによる絵でも有名）をも連想する。

雪卿集 せつけいしゅう

藤生不二男

升田ヤス子

齡には触れずにゐやう春の月

羽繕ふやうに冬芽を啄める

鶯餅胴のあたりを掴みけり

洗ひ場に野蒜屑あり飛鳥川

鞆に御居処はめ込むをみなかな

首塚を遠見に野蒜掘りにけり

人去りて雛の顔の夕暮るる

野蒜掘る力の加減ほどほどに

蛇出でてたちまち杖に打たれけり

摘みにけりぽぼと煙吐くつくづくし

枯草を雉子うつくしく発ちにけり

谷川の淵のみどりに辛夷の芽

一鍬にひと塊りの野蒜かな

啓蟄の堆肥を掘れば動くもの

片栗に大杉の日のこぼれけり

湖色の空やはくれむ浮かばせて

志方章子

永田万年青

浅春や人寄らば鯉散りにけり

寒風にかがみて子の手引きにけり

鐘つけば水仙匂ひきたりけり

洗ひつつもつれをほぐす野蒜かな

老人の記念撮影梅紅し

あれこれの食べ方談議野蒜掘る

春寒やオリンピックに明け暮れて

枝先の一輪紅し冬薔薇

春寒や手をつなぎぬる老夫婦

冬薔薇ほめてゆきたる郵便夫

七色に光る？子解禁日

春雨や爪掛け下駄に傘かしげ

紅梅の咲きしを告ぐる人居らず

春雨や虹出てゐると知らさるる

雛納して来年のあるやなし

リハビリの足湯うとうと春日中

出口 誠

雲の間に日光ありて春分日
強き風受けて菜の花倒れけり
追求にしどもどろの春分日
犬ふぐり青い星団つくりけり
外側は白内側は黄の鼓草
垂るほどに貫禄ありて雪柳
春うらら家の中より家の外
春風にプラスチックの屋根が鳴る



雪樹集

住田千代子

冬牡丹ほつれし菰に紅絹こぼす
梅枝の折れゐてさへも匂ひけり
畦焼きの火を追うて風走りけり
じやんけんのぱあに勝ちたる菖蒲の芽
切つ先に藻屑光りぬ菖蒲の芽
芽柳の梳りたき乱れかな

廣畑 育子

寄せつけぬ程の刺なり薔薇芽吹く
梅らしき梅にあり白杖の行く
真直ぐなる梅の若枝若みどり
野蒜摘む背に聞こえたる鶏の声
石段の隙の野蒜の細きかな
石畳いつ過ぎしやら春時雨

田尻 勝子

寒の水計量カップで干しにけり
臘梅の散ると云ふ事忘れをり
山茶花の赤の静もる老いの身は
いかなごのプランクトンの赤く透け
花の樹の幹駆け登る銀の帯
ドップラー音の突然過ぐる臙です
花に触る手指に移す薫りかな

谷口 一献

陶坏に替へ治鬮酒と致しけり
ちよい呑みが好き春雨の街に出る
雪柳雲の白さと競ひけり
仏の座葉代りに挟みけり
春眠の終り辺りの鳥の声
ブラインド一寸斜めの遅日かな

平居 濤子

赤松有馬守破天龍正義

辛夷咲く標高五百友の故郷

ビー玉の遊びも知らず卒園す

野蒜摘みいつしか一人きりになり

蒲公英の絮玉垣に留まれり

海見えてより鮮やかに梅の紅

また嘘をついてしまひし仏生会

春昼や駱駝ゆつくり膝を折り

雑草に励まされゐる仏生会

半眼に餌を食む駱駝春の昼

咲くは良し散るは尚良し花祭

秘仏見んとて人の行列山笑ふ

城垣の脇に一輪初桜

溝渕 弘志

延川五十昭

雨上がる若芝光る甲子園

一弦の琴静かなり花の寺

大和路や緑に溶け込む鹿の群れ

釈迦仏に二盃三盃くむ甘茶

観寒や心はずませ髭を剃る

いただいて苦みの残る甘茶かな

桜貝真白き皿に行儀よく

敦盛の笛の色あせ仏生会

散歩道春泥懐かし雨激し

花吹雪庭に箒を立てしまま

路地香るいかなご釘煮あふれをり

弁慶のかつぎ来し鐘仏生会

六り花っ集か
集し
集ゆ
集う



六月到着順

小林はじめ

みづ満ちて添水の放つ律かな
春のみづ柄杓のままに含みけり
春のみづ北斎の波かもすかな
探梅す的中みごと至福かな
福寿草はらからのごと集ひけり

江見 巖

宇宙より一直線に春の風邪
顔の中動き回るや花粉症
肩組みで一緒に帰る父子草
三木家との民俗の基礎雛人形
啓蟄や波形を知らず線グラフ



山田六甲

螢雪譚

愛聴のレコードに疵 春惜しむ のぼる

のぼるのクラシック愛好は並みのレベルを遙かに超えている。音にうるさい人はCDでは聞けない音をレコードや真空管に求める。現代のCDには人間の気負えない破調を除いてある。それがレコードでは再生出来るから、聴いて心地よいのである。「そんなマニヤックなこと……」といわれても違うのだから、と反論する。デジタル音に慣れてしまった私たちにはレコードの疵がどれだけ惜しいか察してあまりある。劇場に行っ

て弦楽器の音を生で聴くとその
違いがよく分かる。この間、キ
ムタクさんの演奏会に行った。
その時横に坐っていた人はスタ
ンウェイの調律師なのだった。
調律師といえば神戸に住んでい
たころ、ピアノの調律を頼んだ
ら、やって来た調律師が同級生
だったのでお互いに驚いたこと
がある。レコードで思っていた
が、篠山に年中レコードを真空
管蓄音機で店に流している店主
がいた。今も生きているのだろ
うか。その店の裏の川は蛍の乱
舞で見事なところ。

関伽桶の少し水漏る脊彼岸

のぼる

関伽とは命の水の事でアクア
が語源。死んだ村上水軍の末裔
赤瀬君が「あか」というのは海
の水の事だよ、と教えてくれた。
神社仏閣にある関伽井という

のは御殿の水。水には何物も浄
める力があると信じられてい
る。このような液体は全宇宙で
も地球にしか存在していないだ
ろう。アクアリウム、アクアラ
ング、アクエリア、アクオス、
すべて水に関連した言葉であ
る。

句は桶から水が漏れているの
だ。木で造られた桶だから、少
し乾くと水が少し漏る。それも
愛嬌であり趣がある。水桶が古
色を帯びるのは黴や苔が原因だ
が、不潔とは思わないのが不思
議である。浄められているから
である。

宮鳩を屋根に追ひ上げ脊祭

のぼる

宮鳩は宮に棲み着いている鳩
で神聖な神の使いとして扱われ
る。巷に棲む鳩は糞害だと煙た
がれるが、宮に棲む鳩は別扱い。

でも祭の時は別である。普段見
かけない人間が大勢やってき
て、鳩は落ち着かないから屋根
の上へ追いやられたかっこうで
ある。

車椅子より起立して 卒業歌 のぼる

まさか車椅子で卒業歌を歌う
など自らが想像したであろう
か。一時期は自暴自棄になっ
たかもしれないが、見事精神的に立
ち直って、今ここに車椅子から
起立して卒業歌を歌っている。

この時既に主人公は社会の荒
波に向かって乗り越えて行ける
力強さに自ら、周囲共に感動し
ているのだ。

癒すにはもってこいである。野蒜の一鍬打掘。

升田ヤス子
羽繕ふやうに冬芽を啄める

片栗に大杉の日のこほれけり 不二男

古語では「堅香子(かたかこ)」と呼んだが、片栗の花が原生しているのを詠んだ。大杉林の中にさす日が片栗の花に当って、火が点いたように浮かび上がって篝火が燃えるように見えた。「日がこぼれた」とだけ詠って、

洗ひ場に野蒜屑あり飛鳥川
ヤス子

その後の情景を、読者が鑑賞する余地を残している。点てた茶を黙って客に滑らすような詠み手と読み手のやり取りが阿吽の呼吸であじわえる。この句には「こぼれ」という主観はあるがそれ以外何の技巧も計らいもなく、自然体で受け止めており、これこそ不二男の目指す世界である。

住い場面である。飛鳥川にノビルを洗った痕跡があることが風趣。地元の人が野蒜を掘って夕食にでもと洗ったのか、飛鳥見物に来た人が野蒜を掘って楽しんだのであろうかなどと楽しい想像が膨らむ。主宰も行ってみたい。

一鍬にひと塊りの野蒜かな

不二男

畑の畦を耕していたら、一塊のノビルが掘り起こされて出て来た。その後、ノビルを畦道に放り投げておいて、今夜の酒の肴にするのである。生で食すもよし、酢漬けしておくのもよし。不二男は禅僧ではないから、「葷洒山門不許」にはならないのである。畑仕事の疲れを

首塚を遠見に野蒜掘りにけり ヤス子

前の句に続く作品なら、首塚は、大化の改新のとき、飛鳥板蓋宮で中大兄皇子らに暗殺された時の権力者・蘇我入鹿の首がそこまで飛んできたとか、襲ってきた首を供養するためにそこに埋めたともいわれる供養塔であろう。それを視野に入れながら野蒜を掘る。こういう自然で中身の深い句はいい。歴史的背景の地で詠む醍醐味である。

野蒜掘る力の加減ほどほどに

ヤス子

ノビル掘るに力を入れて抜き出そつすると葉がちぎれてしまふ。余力を入れず慌てずゆったりと掘るのが野遊びのコツ。筈だっけいきなり鎌を打ち込む

と、本命をぐさっと切りかねない。ノビルも竹の子も女性と同じ、慌てず脊の気分を楽しみなから、掘り起こすのが良いのである。何事も深刻にならず、ゆったりのおんびり野趣を楽しむ姿がいい。

摘みにけりぼぼと煙吐くつくづくし
ヤス子

「ぼぼ・ぼっぼ」というのは汽車が煙を吐くさまを表現した幼児語でなつかしい。誰かが、「ぼぼ」というのは隠語ではないが、直ぐ横にある関連隠語「女陰」を連想させる。と言った。

「たんぼぼのぼぼのあたりが火事ですよ 坪内稔典」の句で「ぼぼのあたり」ってどついつい意味？と訊かれる。おそろく稔典の羞恥心によるものか「あたり」とはぐらかしてあるが、本当は「のどころ」と言いたかったの

をオブラートに包むような表現を用いたに違いない。読者はそれを分かっていながら、質問をするのである。

谷川の淵のみどりに辛夷の芽

ヤス子

「の」は軽く、「に」で本切れとなり辛夷の芽との取り合わせ。谷川の淵も池の水も春先、みどりいろになる。淵はまだまだ水が澄んでいるから深く翡翠色。その淵にも春がやって来た。という光景。一句全体で格調を持っている表現。